

# 海人族と丹後の遺跡

## －古墳時代を中心に－

安藤 信策

### 1. はじめに

四周を海に囲まれた我が国にとって、海は魚介類や海藻によって生命の糧を得ることのできる恵みの場所であるとともに、船による交流を通して周辺の地域から新たな文化や生活必需品がもたらされる開かれた場としても重要であった。

京都府北部の古代丹後の地は、日本海に開かれた長い海岸線を持ち海との関わりの深い地域である。したがって砂丘上や入り江近くに縄文時代以来、多くの有力な集落跡が残されている。縄文時代では京丹後市網野町の浜詰遺跡、同市丹後町の平遺跡、舞鶴市の浦入遺跡、弥生時代では京丹後市丹後町の竹野遺跡、同市久美浜町の浦明遺跡、函石浜遺跡、舞鶴市の浦入遺跡など貴重な調査成果を挙げていて、いずれもこの地域にとって重要な意味を持つ遺跡である。

古墳時代の丹後は特に前期から中期にかけて網野銚子山古墳、神明山古墳、蛭子山古墳の三大古墳をはじめ大古墳が築造された地域として知られる。畿内倭政権との密接な関係の中で大きな力を持ったこの地域の有力豪族の勢力の基盤として、弥生時代中期、後期の丹後各地域の拠点集落の発展とともに、特に海との関わりを挙げる説が有力である。三大古墳のうち網野銚子山古墳、神明山古墳はいずれも海岸部に築かれており、またその直下には潟湖が広がっていて港の機能を果たしていたと推定されているからである。<sup>(注1)</sup>

この小論では、近年の発掘調査成果を学ぶ中で、海を生活の場としていた人々の足跡を特に古墳時代の遺跡によって探り、丹後の古代と海との関わりを考える一助としてみたい。

### 2. 小地域の遺跡群と海人族

丹後地域と海との深い関係を考えれば、専ら海を生活の場としていた漁民、航海民の存在を想定することは自然なことであるが、遺跡や遺物の上でそれを証言することは大変難かしい事である。京丹後市久美浜町には海士(あま)という地名が残されていて、この地に海人族の存在が窺われるし、宮津市に所在する丹後国一宮であった籠神社の宮司家は海部家であり、古代の縦系図である国宝海部氏系図を伝えていることは良く知られている。ま

た和名類聚鈔に見える郷名として加佐郡内に凡海郷があり、その所在地としては由良川河口部から大浦半島にかけての海岸部と推定されている。<sup>(注2)</sup>この他にも竹野川下流域からやや山手に入った所にある船木という地名が船造りに関わる地名であるとすれば、そこにも海部族の活躍のわずかな手掛かりが残されていることになる。

しかし全長200mを越える大古墳を築いた豪族の勢力基盤として海との関わりを考えるには少ない手掛かりしか残されていない。

したがって専ら海に生きる專業集団の存在を想定する手掛かりとして、古墳の立地や遺物の特色、そして小地域ごとの遺跡群の関係性から探ってみる事としたい。なお海に生きる專業集団に対して海部族、海部系氏族、海人(あま・あまびと)、海人族(あまぞく)等の呼び方がある。ここでは広く海人の集団という意味で海人族あるいは海人系氏族と呼んでおきたい。

小地域としてここで取り上げてみるのはほぼ東から(1)阿蘇海周辺、(2)伊根町海岸部、(3)竹野川河口部、(4)福田川河口部、(5)久美浜湾周辺である。

さらに東の海岸部、凡海郷が所在した舞鶴市の大浦半島周辺も海人族が活躍した地域であろう。浦入遺跡は縄文時代前期からの海辺の集落であり、奈良～平安時代には大規模な製塩が営まれたことが近年の舞鶴市教育委員会と京都府埋蔵文化財調査研究センターの発掘調査で明らかになった。古墳時代の様相としては2基の横穴式石室墳が存在していた。<sup>(注3)</sup>おそらく立地から考えて海人系の氏族の墓と推定できよう。この地域は若狭地方とも関連し、海人族の動向を知る上で大事な地域であるが、今回はまず上記の5地域について海人族の足跡を検討してみることとする。

#### (1)阿蘇海周辺

前述したとおりこの地には海部氏が奉祭する式内名神大社籠神社が存在する。国宝海部氏系図では養老3年の年紀があるが作成されたのは平安時代前期とされている。海部氏はいつ頃からこの地で籠神社を奉祭していただろうか。系図の年紀を手掛かりとすれば国府が阿蘇海北岸に置かれた奈良時代には籠神社はこの地にあったと推定されよう。

それでは丹後の大古墳を築いた豪族と海部氏との関係はどうだろうか。あるいは海部氏自身がそうした豪族の一人だったのだろうか。本小論の関心もそこにあるのであるが、今のところ発掘成果の中からは何の証言も得られない。しかし丹後の豪族が日本海沿岸部や朝鮮半島との交易によって勢力を得ていたとすれば、航海民を率いていた海人族の首長が大きな役割を果たしていたであろう。そのような首長が後に倭政権によって海人族を統率する海部氏として認められたことは十分可能性があると考えられる。

海部氏との直接的な関係は不明ではあるが、阿蘇海北岸には弥生時代終末期の大風呂南

<sup>(注4)</sup>墳墓群、古墳時代前期末の岩滝丸山古墳、<sup>(注5、注6)</sup>そして中期前半の法王寺古墳<sup>(注7)</sup>といった重要な遺跡が調査されている。この三遺跡の内、法王寺古墳は盗掘のため埴輪や石枕以外には出土品が乏しいが、大風呂南1号墓、岩滝丸山古墳からはいずれも広い地域との交流を物語る遺物が出土していることが注目される。大風呂南1号墓からはコバルトブルーのガラス釧と南海産のゴホウラ貝各1点、そして銅釧13点が、岩滝丸山古墳からは舶載の神人車馬画像鏡と素環頭大刀各1点が出土した。ガラス釧、素環頭大刀とも輸入品の可能性の高いものである。ガラス釧は我が国では現存唯一の完形品であるが、丹後からはもう1点、京丹后市大宮町三重から出土している。法王寺古墳は阿蘇海から大きく見上げることのできる位置に築かれた全長70mの前方後円墳であって丹後型埴輪を持つ有力古墳である。耕地の狭い海岸部の立地からも、その出土品からも、これらの遺跡と海との関わりは十分に想定することができるであろう。法王寺古墳の主体部は長持形石棺、岩滝丸山古墳は組合式石棺で石材はともに凝灰岩であった。

丹後地方の石棺を集成された堤圭三郎氏の論考によって石棺の分布地域<sup>(注8)</sup>を見ると、石棺を持つ古墳が集中するのは加悦谷と竹野川河口部、そして福田川河口部の3地域であり、また阿蘇海沿岸、伊根町の海岸部、久美浜湾周辺にも散在している。このうち加悦谷の石棺の石材は花崗岩であって、地元の山から切り出されたものであろう。しかし凝灰岩については丹後の海岸部のどこかに産出地があると推定され、凝灰岩製石棺石材の運搬には、おそらく海人族が関わっていたと考えられるのである。

## (2)伊根町海岸部

舟屋で知られる伊根町は今も海に生きる人々が多い。耕地が広いのは浦島伝説で名高い筒川の沖積地一帯であるが、その他の海岸部は漁村の性格が強い。伊根町では弥生時代の遺跡は明らかでなく、最も古い遺跡は今も漁業集落が所在する三つの地域に位置する5基の古墳である。伊根湾周辺には中尾古墳とカルビ古墳の2基が存在する。筒川の沖積地には来迎寺裏山古墳、若宮神社古墳の2基がある。そして新井漁港と筒川河口部の浦島漁港との中間に位置する泊漁港の湾内に小泊横穴がある。これらの5基の古墳の立地をみると、来迎寺裏山古墳を除く4基は全て海を見晴らす丘陵端部に位置している。

そして古墳造営の基盤となった集落を考えると、付近に耕地の少ない所であって、漁民あるいは航海民の生活が集落の基盤となっていたと推定されるのである。来迎寺裏山古墳だけは、伊根町内では最も耕地に恵まれた所であるが、その開発の時期は明らかでない。しかも浦島伝説で知られた式内社・浦島神社が鎮座する所であるから、漁民集落との関わりもきわめて深い地域と言える。

以上のように、伊根町内の古墳はいずれも海人族と関わる遺跡と考えられるとするなら、これらの古墳の特色から海人族の古墳の特色のいくつかを導き出すことができよう。5基のうち中尾古墳<sup>(注9)</sup>とカルビ古墳<sup>(注10)</sup>は発掘調査が行われており、他の古墳も主体部等の内容がおよそ判明している。中尾古墳は全長7.3mの横穴式石室である。小泊横穴では須恵器が出土したと伝えられるから、岸壁裾部の海蝕洞窟を利用した古墳と推定される<sup>(注11)</sup>。組合式木棺を主体部としていた可能性が高い。藤田富士夫氏は海洋民の墓の特色の一つとしてこうした洞窟内の墓地を取り上げておられる<sup>(注13)</sup>。他の3基はいずれも組合式石棺を埋葬施設として<sup>(注12)</sup>いる。7世紀前後の築造とされる中尾古墳からは須恵器、鉄刀、鉄鏃等の出土品があったが、カルビ古墳にはなんらの副葬もなく、他の石棺の出土品も不明である。しかし丹後地方の石棺の年代から言って5世紀代のものと推定される。古墳の規模はいずれも小規模なもので地域の海人族集団の首長と見られる。むしろ5世紀という比較的早い時期に海を生活の基盤とする人々が古墳を築きえたこと、また組合式石棺という、有力古墳の埋葬施設であることが多い主体部を採用していることによって、これらの集団の位置付けの高さを評価すべきであると考ええる。

### (3) 竹野川河口部

竹野川河口部の丘陵上に位置する神明山古墳は全長約190mを測り、網野銚子山古墳とともに日本海沿岸部で最大の古墳である。古墳の直下には潟湖が広がっていて港の機能を果たしていたと推定されている。また約0.6キロほど海よりの丘陵端部には直径50mの円墳である産土山古墳<sup>(注13・14)</sup>がある。その埋葬施設は巨大な長持形石棺であり、豊富な副葬品を持っており、地域の王者の墓にふさわしい。神明山古墳の主体部は明らかでないが精巧な丹後型埴輪や土師器が出土している。5世紀初頭から前半にかけてのこの2古墳の規模や内容は丹後の最高首長の古墳に相応しく、大陸や沿岸地域との交易や船による軍隊の移動等、航海を掌握した豪族の威容を示していると見られる。

この地域の海を見晴らす丘陵あるいは潟湖を望む丘陵上に丹後の最高首長を支えた海人族集団の首長の古墳が築かれている可能性が高い。日本海を望む丘陵上には一辺20mの方墳である柘塚古墳、墳形は不明であるが長持形石棺が出土した馬場の内古墳がある。柘塚古墳からは埴輪が出土している。また神明山古墳の南の、かつての潟湖を望む丘陵上に願興寺古墳群が築かれている。この古墳群からは埴輪が出土し箱形石棺3基、舟形石棺1基が見つかっている。竹野川河口部の竹野遺跡内の一本松古墳からも舟形石棺1基、小児用組合式石棺2基と古式須恵器が出土している<sup>(注15)</sup>。これらの古墳はおおむね5世紀代と考えられるが、伊根町沿岸部の古墳と同様に石棺の使用が一つの特徴となっている。

そして6世紀後半から7世紀前半には産土山古墳の所在する丘陵の直下の岬に横穴式石

室を内部主体とする大成古墳群13基が築かれており、眼下に海を臨むその立地から海人族集団の古墳群である可能性が高い。

#### (4) 福田川河口部

網野銚子山古墳が所在する丘陵の東西の低地部にはやはり入り江状の潟湖があったと推定されている。東側にある離湖は西側の入り江の名残りと考えられる。全長約198mの網野銚子山古墳も神明山古墳と同様に潟湖を望む丘陵上に築かれた丹後の最高首長の古墳であるが、神明山古墳との前後関係は明確でない。前方部が低平に伸びるその墳形からは銚子山古墳が一代前と考えることもできる。

この地域にも海を望む丘陵上に築かれた古墳が多数あり、海人族集団の首長の古墳の候補をいくつも挙げることができる。

離湖に面した離山古墳の発掘調査が行われた結果、丹後地方の初源期の横穴式石室である堅穴系横口式石室であることが明らかになった。<sup>(注16)</sup> またこの調査で長持形石棺と組合式木棺を主体部とする離湖古墳が発見された。木棺内からは石釧1、銅釧2、重圈文鏡1と玉類が首出土した。石棺は底石だけが残存し、鉄刀5、鉄鎌9、短甲片等の武具類が出土している。木棺は5世紀前半、石棺は5世紀中頃と見られるこの古墳は最高首長を支えるクラスの古墳として出土品の内容も注目され、立地上も海との関りの深い首長の古墳と見てよいであろう。

この地域の海岸部の古墳で、箱式石棺を用いているものに、勝山古墳、新浜2・3号墳二村2号墳等がある。また岡1号墳は単鳳式環頭大刀を出土した横穴式石室であるが、3～6号墳で箱式石棺を用いている。<sup>(注17)</sup> 石材は福田川河口の西の海岸部、磯地区に産する安山岩と推定されている。磯漁港を有する磯地区は平地のほとんど無い漁村地区である。しかも日本海を望む丘陵部には相谷古墳群3基、庵谷古墳群6基、神谷東古墳群3基、三ツ塚古墳群4基と多くの古墳が点在している。調査が行われた相谷古墳群は横穴式石室墳で、7世紀前半の須恵器が出土した。また庵谷古墳群からは6世紀前半の須恵器が出土しており、箱式石棺と推定される石材も確認されている。

磯地区のさらに西の夕日漁港の岬に築かれた大泊古墳群3基も横穴式石室を主体部とする7世紀前半の古墳であることが明らかにされている。

これらの古墳の中では、離湖古墳がとくに有力な古墳の一つとして注目されることと、箱式石棺を主体部とする古墳が多いことが指摘できる。さらに沿岸部にもかかわらず、横穴式石室が多く築かれている。その有り方は竹野川河口部とも共通するが、それより多くの海人族集団の首長の古墳と推定されるものがあり、潟湖の広がりや港湾としての機能は、竹野川河口部よりも規模がより大きかった可能性を示唆するものである。

### (5)久美浜湾周辺

丹後の沿岸部では最も西に位置する入り江であり、北前船の寄港地として、港としての機能は近世に至るまで続いていた。

この久美浜湾周辺においてまず注目される古墳は、湾内に突出する岬に築かれた大明神古墳群11基である。この古墳群へは舟の方が行きやすく、海との関りを強く感じさせる。この古墳群中には前方後円墳1基を含む4基の積石塚があることが注目される。

先にも述べた海人族にゆかりの地名として大字海士(あま)がある。川上谷川が湾に注ぐ河口近くの右岸に位置する。ここには弥生～奈良時代の土器片が出土する遺跡地であるがその背後の丘陵には古墳群はない。しかし付近には近年発掘された北谷古墳群が所在している。北谷1号墳は4世紀末の長約40mの大型の長楕円形墳で大きな墓壙をもち、整美な石製紡錘車<sup>(注18)</sup>が出土している。

また海士集落の川の対岸の丘陵上に所在する陵神社古墳群20基の中には石棺を主体部とする古墳がいくつかある。中でも12号墳は全長25mの前方後円墳である。川上谷川河口近くの丘陵上にある全長52mの岩ヶ鼻古墳は久美浜湾周辺では最大の古墳であるが、海に近い立地の上で被葬者が海との関わりをもっていた可能性のある古墳である。

湾西方の海に面した古墳としては、大字蒲井の蒲井古墳群、塔山古墳、大字旭の日和山古墳群、旭古墳等も海に面した耕地の少ない立地にあり、海人族集団の首長の古墳の可能性が高い。

地名から海人族との関連が最も確実と推定される久美浜湾周辺であるが、今のところは遺跡の上で海人族集団の本拠地といった状況は見られない。概して古墳時代後期の環頭大刀で注目された湯舟坂2墳の時代までは、5世紀前半の一辺約50mの方墳、権現山古墳を別として<sup>(注19)</sup>はこの地域は多くの中小古墳が築かれながら、特に大きな古墳は所在していない地域である。天然の良港を有しており海人族が活動した地域でありながら古代丹後の領域の中では、野田川流域、竹野川流域、福田川流域といった中心的な領域の外円部となっていた地域とも考えられる。しかしこの久美浜湾はより西方の但馬地方や鳥取、出雲地方への交易の中継地点に当たっており、その意味で海人族集団が拠点を置くにふさわしい重要な地域であったことが推定できる。海士の地名も、海人族集団が一つの拠点を置いたことの痕跡と見られる。

### 3. 丹後の古墳文化と海人族集団

以上のように専ら海に生きる専門集団である海人族の活躍を想定する手掛かりとして、古墳の立地や遺物の特色、そして小地域ごとの遺跡群の関係性を見てきた。そして特に阿

蘇海沿岸部、伊根町沿岸部、神明山古墳の周辺、網野銚子山古墳の周辺、そして久美浜湾周辺にはいずれも海との関わりが考えられる古墳が存在することを推定した。

近年の丹後国営農地開発に伴う多くの発掘調査や、市町村それぞれの貴重な発掘成果によって、丹後の弥生時代から古墳時代全般の具体的な歴史の動きがより鮮明に明らかになって来たように思われる。丹後古代史の躍動の中に、海人族の活躍についてもある程度の蓋然性を持って語りえるのではないだろうか。

まず丹後の古墳時代にとって重要なことは従来から指摘されているとおり、河川の流域ごとにおよそ三つの地域的な中心領域が形成されたことである。すなわち、野田川流域、竹野川流域、福田川流域の三つの領域が形成され、互いに交流や協力、一面では勢力の競いあいや、対立といった躍動的な動きがあったと考えられる。そして全体としては有力豪族が各地域に割拠し、深刻な争いに到ることなく丹後の最高首長の地位が移っていったと推定されるのである。各地の豪族の同盟的な関係を表す顕著な事例は、丹後型埴輪が各地域の最高首長の古墳に採用されていることである<sup>(注20)</sup>。それぞれの地域で巨大古墳を形成した有力豪族の性格や、とくに倭政権との関係については考古学の上からも古代史の上からも多くの説が提出されおり、発掘資料の増加を踏まえて今後ますます深められるであろう研究分野となっている。ここでは海人族集団との関わりを中心として、いくつかの仮説や問題点を挙げておきたい。

#### (1) 海部氏の本拠地は何処か

古墳時代には丹後各地に有力な多数の大古墳が築かれているが、古代の文献に現れる古代氏族の名前とどのように関連するのかは謎に包まれていると言ってよい。門脇禎二氏は古事記・日本書紀に基づいて丹後の古代豪族の縦系図を明らかにされた<sup>(注21)</sup>。この中の丹波大県主由碁理や丹波道主王といった丹後にとって興味深い古代の人々はいったい何処の地域に勢力を持っていたのだろうか。門脇氏は方形台状墓の葬制や豊受大神の信仰の分布圏である竹野川流域をこれらの豪族の政治領域・丹後王国として考えておられる。

また磯野浩光氏は、丹後・丹波の古代氏族名を文献的に整理されている<sup>(注22)</sup>。磯野氏は丹後・丹波の古代氏族について重要な指摘をしておられる。その中で大化前代に丹波国造が存在し、その氏族名は丹波直であって、7世紀後半以降も郡司として勢力を保ち続けたとされている。また海部について、とりわけ与謝の地においては海部の分布は特徴的であると指摘し、『先代旧事本紀』『天孫本紀』による海部直と丹波国造の同族伝承にも触れておられる。

さきに検討した5つの地域の古墳の分布状況をから言って、海部氏の本拠地として最も可能性が高いのは、やはり阿蘇海沿岸部であると考えられる。この地域の海人族の首長と

して活躍し、倭政権によってある時期に海部直として位置付けられたものであろう。耕作地が比較的少ないこの地域において岩滝丸山古墳、そして特に法王寺古墳といった有力古墳が成立する背景に、海部氏の存在を考えて良いのではないだろうか。宮津湾沖の冠島は籠神社の祭祀にとって重要な所とされている。それは海神を祭る沖ノ島と宗像大社との関係によく似ている。籠神社が社殿を整えたのはもっと後代のこととしても、少なくとも古墳時代には海部氏が阿蘇海沿岸部に本拠を置き、海神の祭祀を行っていた可能性が高いことを提唱しておきたい。そして弥生時代終末期の大風呂墳墓群の存在も、この地の海人集団の活躍を例証するものであろう。その被葬者自身が海人集団の首長であったか否かは確言できないのであるが。

また蛭子山古墳、網野銚子山古墳、神明山古墳を築いた丹後の有力豪族とも婚姻等によって関係を深め、同族関係を結んだことも十分可能性があることであろう。網野銚子山古墳、神明山古墳の周辺には、それを支えるような形で海人族の古墳が分布していると推定される。また野田川を遡った位置にある蛭子山古墳、またそれに次ぐ有力古墳群である作り山古墳群等を築いた豪族達も阿蘇海・宮津湾による交易の利を得ていたであろうし、海人族の活躍がその背力基盤の形成に寄与していたと考えられる。

## (2) 丹後の豪族と畿内の豪族

それでは丹後の豪族と倭政権を中心とした畿内政権とはどのような関係にあったのか。

それは畿内政権が各地の支配をどのように進めたかという歴史であるので、この小論で扱うには大きすぎるテーマである。畿内の古墳や各地域の古墳、そして丹後の古墳との共通性や違いを明らかにする中で、その関係の有り方や変化を見てゆかねばならない。ここでは近年の浅後谷南遺跡の水の祭祀に着目して、丹後の豪族と畿内の豪族との共通性を指摘しておきたい。

京丹後市網野町の浅後谷南遺跡は弥生時代前期から平安時代前期までの複合遺跡であることが明らかになり、古墳時代においては流路跡と大量の木製品が奈良・平安時代においては大型の掘立柱建物跡が検出されている。とりわけ流路跡から見つかった浄水施設は4世紀後半に遡るものであった。<sup>(注23)</sup> 浄水施設は2か所あり、いずれも水を堰き止めて上澄み水を取水するものであるが、特に施設Ⅰでは大木を半裁して削り貫いた、長さ3.5m、幅1.1mの導水管が用いられていた。施設Ⅱでは槽と木樋によって上澄み水を得ていた。流路跡からは刀形・剣形・舟形木製品が出土していてこれらの浄水施設で水の祭祀が行われていたことが推定される。

同様の水の祭祀遺跡が奈良県纏向遺跡(3世紀後半)、滋賀県服部遺跡(4世紀)、奈良県南郷大東遺跡(5世紀前半)、群馬県三ツ寺遺跡等で発見されている。近年見つかった飛鳥



の亀石に浄水施設にも共通した水の祭祀の伝統が窺える。特に大和の有力豪族葛城氏が支配した集落に近い祭祀遺跡である南郷大東遺跡の施設は浅後谷南遺跡とよく似ている。ただし南郷大東遺跡では浄水施設の周囲に8か所の柱跡があって建物が施設を覆っており、約250m離れて大型建物跡があり、神殿が付属していたことが推定されている。

浅後谷南遺跡でも流路跡から多量の建築部材が見つかったので、やはり神殿的な建物があった可能性がある。しかも浅後谷南遺跡は網野銚子山古墳から約2.5km南の位置であってこの古墳に葬られた豪族との関わりが推定されるのである。丹後の豪族が大和の有力豪族との共通した祭祀を行っていたことが注目されるのである。

また5世紀になると畿内の古墳には多量の武器類が副葬されるようになり、それまでの被葬者の祭祀的な性格から豪族の武人的性格が強まることが指摘されているが、竹野川中流域の東側にある奈具岡北1号墳は朝鮮半島と関わりの深い陶質土器(あるいは初期須恵器)や銅釦どうこうとともに多量の武器類を副葬していたことが注目される。<sup>(注24)</sup>竹野川河口部の産土山古墳にも多量の武器類が副葬されていた。そして奈具岡北1号墳とちょうど対照的な位置にある竹野川西岸のニゴレ古墳には船形、椅子形、甲冑形埴輪とともに鉄製甲冑が副葬され、やはり武人的性格が窺える。<sup>(注25)</sup>船形埴輪は置田雅昭氏によって準構造船として復原されており、大和政権の豪族達とともに朝鮮半島に渡った丹後の豪族の活動の姿が推定されるのである。

### (3) 丹後の豪族の独立性と海人族

京丹後市峰山町で見つかった赤坂今井墳墓(3世紀初頭前後)は一辺40mの弥生時代終末期としては全国的にも大型の墳墓であり、弥生時代の発展を基礎として丹後に有力な豪族が存在したことを明らかにした。<sup>(注26)</sup>この豪族を弥生時代の丹後の王と呼び、丹後の弥生時代に地域的な王国が存在したと考えても良いと思われる。

それでは丹後の三大古墳が築かれた時代はいかがであろうか。それを築いた豪族はそれぞれに海との関わりが深く、すなわち海人族との関わりが深いと考えている。

まず初めに加悦谷に蛭子山古墳が築かれたのは丹後ではより畿内に近く、また港湾としても若狭を通して畿内に近いことが大和政権との関係を強めたと思われる。そしてこの地域におそらく海部氏の本拠が置かれていたと考えられる。

次いで網野銚子山古墳が日本海側に築かれるのは、京丹後市峰山町にあり、おそらくカジャ古墳を築いた丹波氏と考えられる豪族の本拠から、その支配地域である日本海沿岸の潟湖への進出として理解できよう。航海を司る海部氏の一族もそれを支えていたと思われる。その一因は朝鮮半島により近いことが挙げられ、畿内政権が半島への進出を図る上で、必要な港湾施設であったことが考えられる。

そして竹野川河口に神明山古墳が築かれるのであるが、より軍事色の強い半島への進出に竹野川中流域の豪族が軍事を強めて、おそらく産土山古墳の、あるいは神明山古墳の被葬者等を統率者として半島に渡るといふ歴史が背景にあったと考えたい。

それでは三大古墳を築いた豪族は大和政権に全く従属したいたのか、ある程度の独立性を維持していたのか、どちらであろうか。

丹後弥生王国が存在していたと言ってよい3世紀初頭前後から大阪湾を望む河内平野に大古墳が築かれた5世紀初頭前後に至る200年間は過渡的な国家統一の段階であって、倭政権を盟主とする連合国家の時代であったと考えられる。倭政権が地方の有力豪族の娘を天皇の後妃として迎え、互いの結びつきを強めていることもこの連合国家の性格を物語っている。このように有力な豪族・貴族がその娘を天皇の後妃とし、自らが天皇の外戚となつて力を持つことは、飛鳥時代以後も頻繁に見られることであり、日本の王権の性格として重要な問題を含んでいる。

そして日本書紀に従えば、丹波国の丹波道主王の娘も垂仁天皇の妃となり景行天皇の母となっているのであり、畿内や各地の有力豪族と肩を並べる存在であった。<sup>(注27)</sup>

さらに海との結びつきの強い丹後の豪族はある程度の自立性をもって、国外との交易や外交を行っていた可能性がある。すなわち外交権はまだ完全に倭政権によって独占されておらず、この点でも丹後がある程度の自立性を持ってこの地域を支配していたと考えられるのである。この点でも丹後の海人族の果たした役割は大きかったのである。

後に伊勢神宮外宮に迎えられる豊受大神は、おそらく竹野川流域を本拠地とした丹波氏が奉祭した丹波の神であろう。その名や伝承から窺えるとおり、ウケモチすなわち食物の神として農耕や酒作りの神であり各地において祭られた神であるが、丹波氏が奉祭したことで特に重要な神となったと思われる。聖水を汲んで神に捧げる祭りも、新たに湧き出た水による生命の再生と活性化の象徴として、また豊饒への祈りとして、豊受大神の祭祀の一つであったのではないだろうか。

以上のように、丹後の古墳文化が輝いていた時代、海を通じた交易や交流に海人族は大きな役割を果たし、その活躍に支えられて、丹後の豪族は全国の有力豪族と肩を並べる力を発揮したと考えられるのである。大胆な推論を重ねる結果になったが、大方のご叱正をいただいて今後も検討をしていきたい。

近年に行われた多数の発掘調査成果の蓄積によって、古代の丹後の豪族の歴史的な位置づけがより具体的になされ、丹後の海人族の活躍の姿も一層明らかになることを期待したい。

(あんどう・しんさく＝当センター元職員)

- 注1 三浦 到「丹後の古墳と古代の港」(森 浩一編『考古学と古代史』)1982
- 注2 吉田東吾『大日本地名辞書-上方 第2巻』増補版 1969
- 注3 増田孝彦「浦入古墳」(京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第80冊 1998
- 注4 白数真也・肥後弘幸・長谷川達・高田健一他『大風呂南墳墓発掘調査報告書』岩滝町教育委員会 2000
- 注5 堤 圭三郎「法王寺・岩滝丸山両古墳発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』)1970
- 注6 杉原和雄「京都府与謝郡岩滝丸山古墳発掘調査に参加して」(京都教育大学考古学研究会『史想』第13号復刊第1号)1969
- 注7 注5に同じ
- 注8 堤 圭三郎「京都府北部の古墳概観」(京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財論集』第1集)1987
- 注9 久保田健士「中尾古墳発掘調査概要」(京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第2冊)1982
- 注10 安藤信策『カルビ古墳発掘調査概要』(伊根町教育委員会『京都府伊根町文化財調査報告』第1集)1987
- 注11 京都府教育委員会『京都府遺跡地図第1分冊(第2版)』1988の与謝郡伊根町
- 注12 藤田富士夫『古代の日本海文化』中公新書 1990
- 注13 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査(上)」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』20)1940
- 注14 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査(下)」(『京都府文化財調査報告』21)1955
- 注15 平良泰久・黒田恭正・常盤井智行他『丹後竹野遺跡』(丹後町教育委員会『京都府丹後町文化財調査報告』2)1983
- 注16 浪江庸二・藤原 巧・三浦 到・加藤晴彦・林 和広『離山古墳・離湖古墳発掘調査概要』(網野町教育委員会「京都府網野町文化財調査報告」第7集)1993
- 注17 樋口隆康「網野岡の三古墳」(『京都府文化財調査報告』22)1961
- 注18 田代 弘他「北谷古墳群発掘調査概要」(京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第65冊 1995
- 注19 久保哲正他『権現山古墳発掘調査概報』(久美浜町教育委員会『久美浜町文化財調査報告』第9集)1984
- 注20 佐藤晃一「近畿北部の埴輪」(『はにわの成立と展開-日本各地におけるはにわの導入展開-』第2回加悦町文化財シンポジウム)1994
- 注21 門脇禎二「丹後王国論序説」(京都府立大学他『丹後半島学術調査報告』1983  
門脇禎二「丹後王国論への序章-大山墳墓群の歴史的環境-」(丹後町教育委員会『丹後大山墳墓群-京都府丹後町文化財調査報告』1)1983
- 注22 磯野浩光「古代丹波・丹後の居住氏族について」(京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財論集』第1集)1987

- 注23 黒坪一樹・石崎善久他「浅後谷南遺跡発掘調査概要」(京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第93冊 2000)
- 注24 増田孝彦「奈良岡北1号墳発掘調査概要」(京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第76冊 1997)
- 注25 西谷真治・置田雅昭『ニゴレ古墳』(弥栄町教育委員会『弥栄町文化財報告』第5集)1998
- 注26 岡林峰夫・石崎善久『赤坂今井墳丘墓第3次発掘調査概要報告』(峰山町教育委員会『京都府峰山町文化財調査報告第21集』京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報第100冊』)2001
- 注27 日本書紀垂仁天皇五年の条及び十五年の条の丹波の五女の伝承である。古事記では旦波比古多多須美知宇斯王の女となっている。